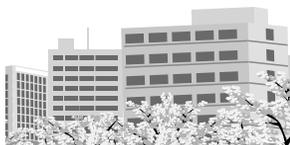


## 会員の広場



### 神社あれこれ

小長井孝（東京）

埼玉県南端に狭山茶の主産地として知られる人口十五万の入間市がある。この地はかつて万葉の時代にはイリマ（入間）と呼ばれたらしい。市内中心部に「愛宕さま」というかなり古い神社が鎮座。境内には樹齢数百年の大木があり気持ちが引き締まる。毎年春の例大祭の「おとろう祭り」では、三百もの露

天商が出て近在から大勢の人を集める。神社には、鎌倉時代の新田義興の首塚があり、勝海舟の篇額もある。例大祭では高さ二十m余の一对の杉柱に幟旗が翻る。神社は人々の生活に溶け込み、住民は気軽に参拝する。「愛宕神社」は、全国に約九百社、京都に総本社があり創建は古く八世紀始めらしい。我が地元のお社はその一つで、火伏せの神である。

元旦祭から新嘗祭まで一年を通して、愛宕神社の祭事では宮司を中心に息子・孫の三代が勢揃いする。珍しいし、めでたい。神社とは自治会の活動から関わりができ、神職としての役割（呼称）が、宮司・禰宜・権禰宜ということも知った。兎年の新年を迎え、新たな気持ちで平和を祈念した。コロナの影響で

関係者が一同に会して宮司の祝詞やお祓いを受けることが憚られ直会も省略、個別にお祓い・玉串奉奠するのみ。最近お札には疫病退散も付け加えられたが、なかなか退散しない。神社といえは、神道との関連が思い浮かぶ。神道はキリスト教やイスラム教などの一宗教に對し、多神教と言えるが、そもそも宗教なのだろうか。ある外交評論家曰く「神道は宗教ではなく、信仰である」と。なぜなら、開祖の教祖がいらない、教団が存在しない、經典が無く戒律もない。なるほど、神道＝信仰と素直に捉えれば良いか。多くの日本人は、自然のあらゆるものに神が宿ると考え、祈る。その中心的な存在が神社であろう。文化庁の「宗教年鑑」によると、八万社以上もあるそ

うで、コンビニよりはるかに多い。

千数百年以上にも亘って連綿と日本人が心の拠り所としてきた信仰だが、神道をきらう風潮もある。七十五年前に日本を怖れ無知故に神道を未開で野蛮な宗教と断じ、政教分離を強要したGHQの呪縛から解き放たれたい。自治会では、会費と共に赤い羽根・消防／交通安全・歳末助け合いなどの募金を会員にお願いし細やかな社会的貢献にも取組んでいる。さらに愛宕神社維持費や山車保存会費も寄進する。ごく少数だが宗教上の理由で拒絶し、神社を忌避する会員もいる。徒歩圏内に初詣の場所がある幸せを感じ取れないようで、気の毒でもある。歴史のある神社が身近にあり、安らぎを覚え誇らしく思う。